



No. 181

ティーブレイク

Tea Break

専門家どうし

会員 正林 真之

夫婦で弁理士をやっていると、そうでない人からよく聞かれるのが、「ご家庭では、どんな会話をしておられるのですか?!」ということである。けれども、同じ状況の方なら直ぐに分かると思うが、そう特殊な会話を日常的にしているわけではない。専門用語を使うようなことも、まずない。そう、そこらにいる普通の夫婦と変わりはないのである。しかしながら、“専門家同士の結婚”ということから、世間一般では妙なことを期待するようである。

ただ、ちょっとした悪ふざけで、あえて専門用語を使うこと（使ってしまうこと）はある。それは例えば、弁理士どうしが飲み屋でふざけ合っているような状態、すなわち、実現が難しそうなものに対して「それは産業上利用性がないだろう!」と言って飲み屋でふざけ合っているような状態と思えばよいだろう。本当に、そんな感じである。要は、専門家である以前に夫婦であり、友人であるという、ただそれだけのことである。

けれども、ふとしたことから夫婦の顔を突き破って専門家の顔が出てしまうことがある。当家の場合、「今年のお盆は、どこに行こうか?!」と訊かれたときに、「去年はグアムだったから、今年はサイパンにしようか...」と応えた途端に、「それは、進歩性が無いから、却下」という答えが返ってきた。もちろん、言った本人とてふざけた結果であるから、言っている内容にも正確さが欠けている。そしてまた、通常であれば何ということはなく聞き逃すようなことなのであるが、たまたまその時にはムシの居所が悪く、なぜか腹が立って（審査官に「進歩性無し」と言われたときの発明者の腹立たしさが、よく分かるというものだ...）、「予想外のこともあるかもしれないし、実際に行ってみなければ、わからないだろう!」「だいたい、進歩性無しなら拒絶理由で、いきなり

却下は、ない。反論の機会くらい、与えられるものだろう...」などということ、夫婦喧嘩が始まった。

もちろん、普通であれば「いくらなんでも近すぎるから...」などと言われるべきものである。ただ、なぜか専門用語が出てきて、専門家のスイッチが入ってしまうと、些細なことでも気になって指摘することになってしまう。そしてついには口論になる。

ところで、弁護士と税理士の夫婦が居て、お互いの専門のことについては言及しないというようなことを言っておられた。つまり、弁護士の夫は税務のことを口にせず、税理士の妻は一般法務に関することを口にしないといったような具合である。もちろん、それを口にしてしまうと、さすがに専門家なので、その欠けているところを指摘したくなる。そしてそれが、意味のない夫婦喧嘩に繋がることを熟知してのことである。すなわち、専門家どうしの夫婦というのは、変な諍いを起こさないために、互いの専門の領域には踏み込まないという決まりのようなものを持っているのが普通である。それはある意味、長い結婚生活の中で獲得された「生活の知恵」というものであろう。

では、微妙な関係の専門家どうしというのはどうか。弁護士どうしは、我々弁理士どうしの夫婦と似たようなところがあるだろう。弁護士と裁判官は微妙かもしれない。ただ、聞いたところによると、弁護士と検事という組み合わせは、あまり良い組み合わせではなく、だいたいは結婚に至らないし、もし結婚したとしても離婚してしまうことが多いという。そう言えば、「夫婦そろって弁護士」というのは結構聞くけれども、確かに「弁護士と検事の夫婦」という組み合わせは、あまり聞かないような気がする。「矛盾」というわけではないが、“攻め”

と“守り”で、どちらが強いのかということ自体が不毛なのである。

ならば、「弁理士と審査官」という組み合わせは、どうなのか。これも、許してもらう方と拒絶する方で、互いに対抗する関係にある。実は私の弁理士合格同期には、かような組み合わせの夫婦が存在する。また、特許庁内で庁内結婚をし、いずれかが退職して弁理士になった場合も、そのような組み合わせが誕生することになる。けれども、それが原因となって結婚生活が破綻したことは、あまり聞かない。

翻って、進歩性判断の基準として「阻害要件」という考えがあるが、「阻害するものが無ければ組み合わせ容易」というのは、本当なのだろうか。少なくとも、結婚の場合には、阻害要件が無いからといって、直ぐに組み合わせるものでもないだろう。むしろ、その組み合わせ

が生じる積極的な要因が必要である。

例えば、弁理士どうしが結婚をするのは、お互いにフィールドが同じことによるものである。つまり、同じ言語をしゃべって仕事をするからであり、それによって通常以上の親しみが生まれるからである。そしてそれは、弁護士夫婦のような他の専門家どうしの夫婦も同じ事であろう。

けれどもその言葉を家庭で使うことが、喧嘩の原因にもなる。専門用語というのは、互いに夫婦をくっつける働きもするが、喧嘩を生じさせることもある。この不思議な矛盾を解決することができたのであれば、それこそ、疑いもなく「進歩性あり」ということになるだろうが、とりあえずは我が家では、どんなに些細なことであっても専門用語は使わないと、そういうことになったのである。